

---

# リンクエイジ

フェニックス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リンクエイジ

### 【NZコード】

N5436Z

### 【作者名】

フニックス

### 【あらすじ】

人間の中の世界で、二つの軍隊が競いあっていた。人間の心を守るカオス軍、人間の心を巢くうソーサラー軍。

この物語りは若きカオス予備軍の話だった。

## リンクエイジ

「さて、俺達は何処へ行くのやら」「俺は……いざれ親父と決着を着けなくては。ナゼ、カオス軍がソーサラーに寝返ったのか。それだけだ」「私は……人の心を守りたい。無謀な事かも知れないけど、一人でも多く救いたい。ただそれだけ」「俺は……この世界と人間の世界の行く末が見たい。その為に前線に立たなくてはいけないんだ。列もみずほも意見は違うがたどり着く先は一緒だ。違うか?」「そうかもね。後は……愛しのダーリンと……」「オッ……俺は認めないからな!もつと巨乳が良いんだから」「悪かったわね。貧乳で!」「ウワウワー……ギブ!ギブアップ」「フフン。見たか!みずほ様のバカ力!見くびんなよ!」「お前たち……暴れるな。後で父上に怒られるのは俺なんだから」

「ありがとよ。パトリック。お陰で楽になつたよ。んじゃーな」

「ネーネー列。これからどうする?まだお昼よ」「ン?もちろん昼寝!」「ハーツ?ナニソレ!アノ~さ……私も暇なんだよねー。ダーリン君。例えばー……遊園地とかー、お買い物とかさ。あるじやない?」「ウ~ム。……無い。無いな。ハハハハツ」

ドッカーン!

爆風の衝撃が走る。

「ナッ……なんだ？ テロか？ 行けりうーみずほー」「エッ……エエ。……良いとこだつたのになー。なんで「ウなるの？」」「何事だ！ 列！ 涼まじい衝撃だつたぞ」

見るとビルの合間に人だかりが出来ていた。

「あそこだー行くぞ！」

爆破されたビルの上空を一人の男が浮かんでいた。「あれはエドワード。エドワード・スカイ。治療できたのか」「スース…ス…ストッ…オヤオヤ、カオス予備軍の諸君。ごきげんよう」「エドワードー治つたのか？」「アア、南条列先輩。全てわかつた。私の道が間違つっていた事も。私の故郷を滅ぼしたのはカオス軍。彼等が弱すぎたから滅んだのだ。もう迷わない。俺はソーサラー軍三等兵。エドワード・スカイ。またの名を、忍者 カゲツ。以後、お見知り受けを」「なんだと！ 血迷つたか！ エドワード！」「パートリック・レドガー 先輩。貴方には感謝しますよ。ハーツ…最高だ！ この力。エネルギーが満ちてゆく。これがソーサラーか。

素晴らしい」「ハドワード！ 戻つてこい！ 君は間違えている…」「手放せませんよ。私の過去は。貴殿方との会話は最後にしますよ。次は人間の心の世界でお待ちしますよ。健闘を期待していますから。それじゃー」

「……………ハドワード……ナゼ」「列。弱すぎたのはハドワードの精神力だ。……………彼は、ソーサラーに落ちた。今後は敵だ」「ソツ……………そんな……………バカな」「行きましょう。列。パトリック。ここには何も無いわ。何も……………】

三人は絶望の中、ハドワードが飛び立つ姿を見た。

「オヤジー！ スパイダー！ 許さん！ 絶対にたどり着いてみせる。お前が土下座するその日まで！」

「列。また会えたな」「お前は……………シルバー・オックス。兄さん」「お前に話さなくてはいけない事がある。俺達兄弟に関わる話だ。良いか？ 一人で」「構わないよ。どうせ暇だもん」「着いてこい。列」

「アリヤツ……………ダーリンは？ネエ、パトリック。列、みなっ  
た？」「イヤ。知らんが」

列とシルバーオックスは霧の中に消えた

## リンクエイジ その2

「素晴らしいモンストレーションだったよ。ハドワード君」「……これからですよ。鴉様。忙しくなりそうですね」「退屈よりは良いであります」

「列、話がある。着いてこい」「兄さん。シルバーオックス」

「兄さん…………」の前はありがとう。なんとか無事に帰れたよ」「列。ナゼ今になつてお前に会いたくなつたかわかるか？」「…………なんでだろう。スペイダーが動きだしたとか？」「それもある。だが、肝心なのは今後の話だ。俺が表れた以上、連中の攻撃も激化するだろう。はつきり言おう。昨日の攻撃はお前を捕らえに来たのだよ。奴等が欲しいのは人間の心では無い。それに気づいて介入した。それだけだ」「ナゼ、僕を捕らえに？」「気が熟したからだ。スペイダーとて永遠に権力を保つ事は出来ない。だから後継者が必要なのだ。ソーサラーの血が流れる俺達ならその王座に相応しい。たまたまそんな星の元に産まれたのだ。我々は。つまりお前が捕らわれたら俺も都合が悪い」「一つ聞いて良いかな？兄さんは今まで何處にいたんだ？」「知りたいか？後には引けないぞ」「構わない。俺は決めてるんだ。必ず父さんにたどり着くと。俺達双子を捨ててソーサラー軍に寝返った父さんに！」「…………そうか。安心した。俺は見ていた。お前たちの行く末を。お前の影となり、常に見てい

た。決して表に出ること無く、深い影の底で見ていた。お前を力オス予備軍に導いたのは俺だ。その先に父親や宿命がある」「… そうだったのか。俺の辛さや苦痛。その全てを一人で受け止めていたのか？兄さん」「慣れている。それを糧に育ててきた」「兄さんも力オス予備軍なの？」「そう言われる覚えは無い。初めてだ。影の宿命だな。俺はそれに従つただけ」「グスン……ありがとう。兄さん。貴方がいなかつたら僕はここにはいなかつた。不思議だつたんだ。僕の父親がスパイダーだと知った時、痛みは無かつたんだ。ナゼか。……一緒に来てくれないか？皆に紹介したいんだ」「照れ臭いな。俺が見ていたと聞いて怒る奴はいないか？」「関係無いよ。そんなやつ俺が殴つてやるつて。スカーンと。行こうよ」「… そうだな。いつかは話さなくてはいけないんだ。今であろうと何時になろうと。我々、影の軍隊に對してな。案内しろ。列」

「オーケイ！パトリック！みずほ！」「列？貴方、何処に行つてたの？」「ン？新しい仲間の所さ。紹介するぜ！ジャーン！南条 隼人さんだ」「隼人？ダレ？」「ウオッホン。エー……俺の双子の兄さんさ」「カツカツカツ……また会つたな。シルバー オックス。あの日は世話になった」「構わないさ。パトリック。それにみずほ。デカく逞しくなつたな。俺は列の影となり、お前たちを見ていた。れつきとした力オス軍になるよう誘導したのは私だ」「要するに私たちの先輩ね。宜しくお願ひしますわ」「南条 隼人。今後の事を考えると敵は作りたく無い。俺達に協力してくれないか。頼む」「そのつもりだパトリック。都合が良いだろう。お前たちを知つてゐる男が側にいると」「アノ、サー……私、列のダーリンで良いのかな？隼人さん」「知らん。勝手にやれ」「ヨツシャー！エドワ

ードの代わりだ！見てろよー。エドワード・スカイーお前の選んだ道が間違えていたと俺達が証明してやつから！」

次の日、南条 隼人は学園長の部屋にいた。

「おひさしひぶりです。園長。南条 隼人。シルバー・オックス。ただ今、戻りました」「ウム。南条 隼人。南条 列の双子の兄よ。これよりカオス予備軍として迎え入れる。サア、仲間の元へ行け。新生力オス予備軍の元に」「ありがとうございます。必ずや彼等を導いてみせます」「頼んだぞ。シルバー・オックス」

絶望の中、シルバーオックスはカオス予備軍に加わった。新たな仲間を得た四人はグラウンドを走っていた。

目を細め煙草に火を灯す学園長。「良かった。これで、さて、ハードポインターの準備をしないとな」

続く



## リンクエイジ その3

「学園長。ハードポインターの装着が完了しました」「ウム。彼等を呼んでくれ」「失礼します」

学園長に呼び出される四人。

〔君達には特殊任務について貰つ。来なさい〕格納庫に行く四人。

「なんだ?コレ?俺のマシンが」「知っているかね?ハードポインターだ。別名、特殊武装。重甲武装とも言うが。これからは風当たりも厳しくなる。本校も対策を練らなくてはいかん。そこでだ、急速、入荷を急がせた。開発中のマシンさ。南条 列 及び、南条隼人。君達にはこの攻撃力を強化したドリルプレッシャー。パトリック・レドガー。君には偵察力を強化したこの、スカイプレッシャー。祐希 みずほ。君には奇襲攻撃に特化したマリンプレッシャー。各々、専門ジャンルの違うマシンを本日より、使用する」「スッゲー!ドリルプレッシャーか?この光沢。新品の匂い。ハーッ……たまらんな!」「これが俺の相棒か?小回りが効いて悪くないな」「素晴らしい。このモニター。いよいよ俺も空を飛ぶか」「何よ!この力ラーリング。私はね、ピンクちゃんに決まってんだから!中は意外と狭いのね。色は後で塗り替えよう。お菓子入るかしら?」

「それとだ、救護班が必要になるだろ？入つて来なさい」「……ヒヨコッ……スノ」「あんたは……確か。スノちゃん？」  
「スノー！おひさしひぶりですの一。ブイツ」「……ハーツ。参つたぜ。ブイツを覚えたか？このガキ」「ピビーツ！」「一ラーヴ！」「赈見えても成人でスノよ！ピビーツ！マチナサーイ……スノ」「賑やかになりそうね。隼人さん」「良いんじやないか？我々には無いキャラクターで。列も大変だな。あんなチビッ子に振り回されて」「かも知れないと皿さが出ない。だから人は人を求める。そうでしょ？」「パトリック。良いことを言うな。その通りだ。あのスノちゃんもアクセントにはなる。だから入れたんだろう。救護班兼ムードメーカーだ。良い選択だな」「私も取られない様にしないとね。負けないんだから！ちょっと列！マチナサーイ」「……わからん。恋敵と言う者はみんなチビッ子でもなるのか？」「サア。みずほは真っ直ぐだから。一度ターゲットを捕らえると離さない。それが仇でしょっちゅう別れてるがな】

「ザーザー……諸君。おはよう。私だよ。エドワード・スカイだ」「ナッ……なんだと！園長！このセキュリティーはどうなつてる？」「完璧だが。彼は力オス予備軍だった男だ」「……何の用だ！悪党！」「アー！君！困りますの。お薬の時間でスノ」「心配ない。今回だけの特別サービスだ。南条 列。いや、烈火のシャクヤ。君に挑戦状を届けに来た。明朝、未明。私とゲームをして欲しい。無論、一人でな。来なければ人間の心は頂いた。簡単な

ゲームさ。陣取りゲーム。知っているよね？それでは「機嫌よう」

「力オス予備軍に介入なんて！舐めた真似を…」「列！落ち着け！  
罷だ」「陣取りゲームか。つまりお互にカードを出しあつて強い  
カードが陣地を広げられる。囮碁の様な物か」「ゲームですか？樂  
しそうですの！」「一体何を考えてるの？エドワード。一人づつ呼  
び出すつもり？」「みずほ。おそらくその通りだ。次から次に果た  
し合いをやる。列。兄弟からの忠告だ。今回は見合させ。敵の出方  
がわからないんだ。それより新しくなったこのマシンに慣れる。長  
期的に見て今すべきテーマだと思つが。エドワードはその後でも遅  
くは無い。そう思わんか？」「そうよ。實際このチームだつてうま  
いくかわからないんだしね。試してみないと」「マシンの具合にチ  
ームの調整か。列。いずれやることになる。だが、それは俺達とし  
てだ。お前一人では行かせん！どうでしょう？学園長」「ウム。ま  
だ奴は何もしていない。訓練を許可しよう」

続く

## リンクエイジ その4

「兄さん。宜しくお願ひします」「アア。あくまでも肩慣らしだ。マシンの具合を見たいからな」「スカイプレッシャー。出撃準備完了」「こっちもオッケーよ」「ソウルゲート…オープン！行くぞ！皆」

四機のマシンは人間の精神の世界に飛び立つ。

「烈火のシャクヤ様。おはよづござります。今回はデモンストレーションです。お間違いありませんね」「ウン。皆、マシンの具合はどうだ？」「快適だ。素晴らしい」「こちらスカイプレッシャー。鋼のトウゴウ。偵察システム、分析システム、共に異常なし」「水虎のキョウカ。マリンプレッシャー。こちらも安定してるわ」「ヨシ。俺と兄さんで先行する。キョウカは後に続け。トウゴウは最後列から指示を」「わかった。トライアングル フォーメーションだな」「全体の指揮を高める良い陣形ね。アツウーン…さすがダーリン」「ザーザーッ……スノ、スノ……聞こえますの！パルスのバランスも最高ですの！」「キーン……聞こえてるよ。スノちゃん。もう少し静かに頼めない？」「出来ますの！了解ですの！ブイッ」「シャクヤ。その……スノとかブイッとか……なんとがならないか？」「学園長。偵察機の具合が見たい。ダミーを射出してください」「わかつた。君達のレベルに合わせたターゲットを準備してある。今、射出する」

「スカイプレッシャー。目標を捕捉した。スカウター偵察機、射出」

ヒュンヒュン。

二機のスカウターがスカイプレッシャーから飛び立つ。

「モクヒョウ、トラエタ、ザヒョウ、オクル」機械音が鳴り響き、四人に座標が送られる。

「学園長。その偵察機は敵に見つかる事は無いのか」「心配ない。ステルス機能付きだ」「なら、先回りされる心配は無いな。便利な物だ」

「烈火のシャクヤ。目標を捕らえました。左に三機。右に一機。左から狙う」「なら俺は援護する。皆、左に旋回しろ。トウゴウは後ろに気を付けて」シャクヤはミサイルのトリガーを引いた。

ズガツガツガツガツ

ダウーン！ダウーン！

「オシツ！—機擊破！」

ダスッダスッ

ダウーン！

「シルバー オックス。一機擊破。簡単な任務だ」「援軍襲来！距離  
5000。左から来る」スカイプレッシャーが援軍を確認する。「  
オッケー！私に任せなさい！マリンプレッシャー。ファンネル射出  
！」

ズバツバツバツヒューン

マリンプレッシャーの後部が羽の様に展開し、追尾メカが射出される。

ドスツドスツドスツ

追尾メカが目標を爆破する。

「追尾メカがあ。良いなあ。アレ」「シャクヤ！来るぞ！左！」  
「ヘッ？左？」

バスツバスツ

キツキキ「アブねえ！ヒュー間一髪。まだ残つてたのか増援」「  
氣を抜くな。シャクヤ。任務は無事に終わる事だ」「だいぶ慣れて  
きたな。この操縦。ヨシ！俺一人で突っ込む！援護しろ！」「フオ  
ームーションを崩すな！シャクヤ！」「わかつてらー！ウオーツ！」

シャクヤはダミーに突進した。「あのバカッ！キヨウ力。距離を詰めろ！俺と一列になれ。守りを固めつつ援護する】

ズガツガツガツガツ

シャクヤがダミーを撃ち落とす。

「へへッ…どうだー見たか」「調子に乗るなーシャクヤー下がれ！」  
「エッ？もう終わり？つまんねーの…………」「更に増援！次は突進するなよ。シャクヤ」「…………わかつたよ。戻る」「それで良い。シャクヤ。一本の矢は折れやすい。四本の矢ならある程度の衝撃に耐えられる。それが絆だ。スパイダーにしてもエドワードにしてもそれを知らない。絆は無限の力になる。だが、無限イコール0にもなるのだ。来るぞ！援軍」「ありがとう。兄さん。皆、行くよ。ゴメン。俺は…………一人じゃ無い。無かつたんだ」

「なんだ？あの大軍。園長の野郎！トウゴウ数は？」「500。いや、もしかしたらそれ以上」「やッベージャン。怒らせたかな？さつき。こりやー追試だな」「どうするの。まともにやり合ったら負けよ」「俺にサクがある。皆、着いてこい。後退するぞ。敵に背を向けるな」

続  
く

## リンクエイジ その5

四人は人間の精神の世界で訓練をしていた。

「いいか？あんな大軍とともにやり合つたら全滅するだけだ。そこでだ。トウゴウ。お前は偵察機を射出し奴等の気をそらすんだ。その間に我々は後ろに回る。回つたらキヨウカ。お前のファンネルで先制する。俺とシャクヤは左右に旋回し包囲網を作る。わかつたか？」  
「わかったよ。兄さん。やつてみる」「面白い作戦じゃない。良いわよ」「戦局は隨時変化する。そのつど俺が分析しよう。任せとけ」「行くぞー皆ー！」

トウゴウが偵察機を射出する。「ここだ！サア来い！」ズガツガツガツガツ。「今だ！シャクヤ！キヨウカ！着いてこい！」三人は旋回し後ろに回つた。

〔今よ！ファンネル！フル射出！〕

ヒュンヒュンヒュン。

「シャクヤー左だ！」「わかつたよ。兄さん」

ダミーの大軍の進路が徐々に狭まる。

「効いている。効果的なタクティクスだ。さすがシルバーオックス。戦術、技術、リーダーシップ。全てが完璧だ」トウゴウは感心した。「この戦術は覚えておきたいわね。今後の為にも。確かに新しいマシンも大切だわ。でもそれを補う戦術が無いと全てが無駄になる」

キヨウカはファンネルを操作しながら考えた。

「今だ！シャクヤー！撃て！全弾を奴等に！」「ヨッシャー！行くぜー！」

ズガツガツガツガツ

退路を断たれたダニーはその数を減らした。

「最後の一機まで気を抜くな。そのスキが仇になる」

「残り、50、40、10、零。任務完了」「トウゴウが敵の数を数えた。「ザーザーッ……見事だ。君達。もうすぐエネルギーも尽きる頃だろう。戻つて来なさい」

「フーッ……まったく園長様も遠慮無いんだから。ハーッ……凄い汗。直ぐにお風呂ね。列君も誘っちゃおうかしら?」「シルバーオックス。ありがとうございます。お陰で勉強になりましたよ」「兄さん。何故、今の戦術を?」「覚えておけ。大軍を相手に分散攻撃は効率が悪い。徐々に四方を固めて一点集中で攻撃するんだ。分散してしまうと彼等の思うつぼだ。固めて排除する。基本戦術だ。覚えておけ」「兄さん……」「ごめんなさい。僕は新しいマシンに興奮して冷静になれなかつた」「良いんだ。修正出来る範囲ならいくらでも間違えて」

四人は人間の精神の世界から学園に戻った。

「スノ……スノ……ドキマスノ。お掃除ですの」「今、帰りました。学園長」「オオ。シルバー・オックス。南条 隼人。ご苦労だつたな。どうだ?新しいチームは」「悪く無いですが。これではスパイダーには勝てません。彼は例のデッドアントラーを一人で操っている。これでも、これからも、我々の障害になるでしょう。デッドアントラーだけでなく、夜叉の鴉や、エドワードもおそらく彼の下部でしょう」「はつきり言うな。まあ今すぐ、スペイダーとやりあう訳では無い。徐々に彼の包囲網を固めて行けばそのうち出てくるだろ?」「おそらくはエドワード。彼を使って来るでしょう。かつての仲間を。彼は完全にソーサラーに落ちたとは考えてません。針の糸を通す程の力オスを感じました。それが彼に残された唯一の望み、理性です。それでは」

シルバー・オックスを入れて正解だつたな。彼の洞察力は少年たちの肥やしになるであらう。彼が力オス軍で良かつた。敵には回したくないな。

南条 隼人。彼の参入で力オス予備軍は変わらうとしていた。

続  
<

## リンクエイジ その6

闇の中の深い谷にライブハウスがあった。スパイダーの住みかだった。中ではメガデスのトラストがかかっていた。

「スパイダー様。エドワード・スカイ。ただ今、参りました」「オオ。待つておつたぞ。エドワード。サア、契約をしよう。我輩の軍門に下ると」「承知しております。必ずや南条列を連れて参ります。我が命に換えても。我々でカオス予備軍を壊滅させる事を誓います。スパイダー様」「よろしい。我が軍を貴公に託そう」「いいえ。結構です。私一人で参ります。私が欲しいのは完全なるソーサラー。その為のお力を貸して頂きたい」「宜しい。武器を授けよう。だが失敗したら、命は無いと思え。貴公の命と引き換えに授けよう」「ありがとうございます」エドワードは黒装束と杖を貰った。

シャーン。シャーン。シャーン。

エドワードはライブハウスを後にした。

「ホホウ。意外とお似合いではないか?サイズもピッタリだ」「あ

りがとうございます。夜叉の鴉様。もう、連中への挨拶は済んでおります。暫くは向こうにいますね」「で、ターゲットにする人間は決めたのか?」「ハイ。病院です。病気で弱った人間の心を巢食うつもりでいます。連鎖反応で蔓延でけますし、まずは私の軍隊が欲しいのでね。では、行つてきます」「待て。新しい名前も必要であろう。ソナタに授けよう。今日から夜叉の死神と名乗るが良い」「ありがとうございます。夜叉の死神。必ずや天を落として見せます。どうぞご覧下さい」「それから、念のためこれを。追尾メカだ。直ぐに私に繋がる。持つていけ」夜叉の死神は追尾メカ クローーと共に飛び立つ。

さて、力オス予備軍諸君。どう動くかな。

「列。お願いがある。暫く泊めてくれないか？」「当たり前だよ。兄さん。まだ母さんに会わせて無いんだから。あつと喜ぶぜ。いや、絶対そうだ!帰らう」

「久しぶりね。隼人。15年ぶりかしら。マア、座りなさい。今、お茶を入れるわ」「母さん。すまない。今まで奴を探していた。我が家、スパイダーを。ようやくその刺客が列を襲い始めた。正確には予備軍の戦いに介入し始めた。連中の狙いは学園の崩壊。つまりカオス予備軍を減らす事でカオス軍の縮小化を考えている」「ハイ。どうぞ。お茶。荷物降ろしたら?」「アア。今まで列を導いたのは俺だ。全てが計画通りだつた。カオス予備軍に入園させたのも、彼ら等にソーサラーと戦う宿命を背負わせたのも。全てが計画通りだつた」「あの日、何が起こつたの?双子が産まれたあの日」「聞かされて無いのか?」「私は病院にいたから。気がついたら双子は一人しかいなかつた」「……そうか。長い話になるが構わないか?」

それは15年前のクリスマスの夜だつた。神々は双子を受けた。一人は南条 列。一人は南条 隼人と名づけられた。二人は生まれつき刺青があつた。列は十字架の刺青。隼人はドクロの刺青。それはソーサラーの息子だと証しだつた。その夜、病院は騒がしかつた。

「渡せ!我が主の後継者を…ここにいるのはわかっている」「お待ち下さい!今、産まれる最中ですから…お静かに」

「看護婦さん！下がつて頂けますか。貴女にはそのソーサラーは倒せません。サア、早く」

「貴様！ムーンドウース！カオス軍の騎士、ムーンドウース！」  
ソーサラー！立ち去れ！貴様ら野郎には指一本触れさせんぞ！我が白き薔薇の前に散るが良い」「ギーイシャー！おのれ、カオス！ちよこぎいな青一才が！」「カーツ……貴様の胸に聞いてみろ。そ  
の胸に刺さった薔薇が赤く染まる時、それがお前の消滅だ！立ち去  
れば、5秒位は伸びるが？どうする？」「ナニ？貴様、いつの間に  
薔薇を投げた！……ヒィー」「動いたな！ブラッディ・トルネ  
ドー」「カハツ！ギーイシャー！」

ポンッ。

ソーサラーは消えた。「戦いに血など要らん。美しく散れ。さて、  
俺は任務があつたな。急げ！」

バタンッ

「誰ですか？手術中ですよ！」「お医者様。すいません。もし宣し  
ければ、そのドクロの刺青の児を取りたい。立派なカオス軍の  
騎士として育てる。依頼書もある。ここに」「マア。そうでしたの

?騎士様。それではお願ひします」「承りました。必ずやソーサラ一軍の刃となりましょ。この話しほ内密に。ソーサラ一軍に狙われますので。双子は居なかつたと言つ事で。それでは」

「南条 隼人。南条 列。古文書にこんな話がある。十字架とドクロが交わる時、新たな力オスの力が開放される。我々はその閉ざされた門を目指す。例え逸話だとしても、信ずるしか無いのだよ。我々には。その時を楽しみにしている」

「我が師匠、ムーンドゥース様から聞いた話だ。つまり我々は後継者でもあり世界を救う扉でもある。だから狙われているのだ」「……そんな話が貴方達の産まれた日に……知らなかつたわ。確かに私が身籠つたのは双子。でも目覚めた時には列しかいなかつた」「でも、ソーサラー軍は一人でも連れて行こうと列を狙つたのです。私は貴方の息子、力オス予備軍の南条 隼人です。列の影に潜み、淡々と時を待ちました」「……辛い思いをさせてしまったわね。全てはスパイダー。あの遺伝子が無ければ……」「我々は巡り会う事はなかつた。だから、母さん。一言、お礼が言いたかつた。長くなつたがな」

続  
く

## リンクエイジ その7

廃墟と化した病院の上空を、夜叉の死神は旋回していた。

「フン。見つけた。手頃な獲物。それは医者！お前だ！病んだ心にソーサラーが巢食つてやろう。容易い任務だ」

ササーツ

風に紛れて夜叉の死神は介入した。静かに、音も無く。

「何者だ！私の心に入つて来るお前は」「拒むな。貴様の心。この死神が引き受けた。サア、楽になるが良い。私に着いてこい」「死神？ソーサラー？何の話だ！」「もう終わりだ。既にシードを植え付けた。お前から毒を撒き散らすのだ。ソーサラーの毒素を」「なんだと？…………嫌だ！断る！俺は…………俺は医者だぞ！…………ウツグッ…………胸が痛む」「抵抗すれば命は無い。素直に我々に従えば良いだけだ」「嫌だ！落ちたく無い。…………ウツグッ…………このまま朽ち果てるのか。…………ガクツ」「フン。手こずりやがつて。大人げない。行くぞ。病院を崩壊させるのだ。お前を軸に、ソーサラーの下部を作る。我が軍隊を。見ておれ！南条 列！必ずや貴様

を引きずり出してみせる。そしてスパイダー様の元に連れていく

エドワードの理性の燈は徐々に小さくなつた。たつた一人。カオス予備軍を寝返つた男の宿命だった。

「列。『ご飯にしましょう。降りて来なさい』」「フムフム……ウミ  
ヤイ！兄さんも遠慮すんなよ。これも食べな」「列！何度言つたら  
わかるの。食べながら話さないの！」「フムフム……だつてー…  
ウーム……ウミヤーイ！最高だな！この肉！肉、肉、野  
菜、肉、肉……オカワリリー！」「……何か飛んだぞ。口内爆  
弾か？」「ガッハハハハツ……楽しいなー。ネー兄さん？」  
「悪く無いな。これが俺の家族か。俺は帰る場所を求めていた。ス  
パイダーでもソーサラーでも無い、帰る場所を。帰る場所があつて  
の戦いだ」「スッゲーやーさすが兄さん。本当に双子なのか？」「  
育つた環境が違うだけだ。……まだ食うのか？ハハハハツ。勝  
てないな。食い気では」

「ハーツ…………列と隼人さん、どうしてるかしら？上手くやつて  
るかしらね？電話してみようかしら？」

「モシモシ？列？何やつてんの？」「ドンガラガツシャーン！マテ  
ーイー待て！待てー。俺のチャーシュー取りやがつて！」「早く食  
わないのがいけないんだろ！飯は戦場なんだ！」「ウイー···返  
せー！俺の肉！吐いてでも返せー！」

ブツン···ブープーブー

「心配するだけ無駄ね」

祐希 みずほは静かに電話を置いた。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5436z/>

---

リンクエイジ

2011年12月24日11時50分発行